



「声」の欄・投稿規定

★「声」の欄は読者の皆さんのお考えを、直接この雑誌に反映させるためのページです。皮膚病の診療に関する日ごろのご意見、新しいアイデア、ご提言などをお気軽にお寄せください。とくに日夜第一線で診療に活躍しておられる先生方からのご投稿を切望します。

★この欄にはまた皮膚病に関する“質疑応答”を取り上げます。お寄せいただいたご質問は、その方面の権威に依頼して適切な回答を用意し、誌上で発表いたします。とくに回答者を指名されても結構です。

★字数は一般のご投稿は1,200字以内、質問は600字以内を原則とします。

★ご投稿は郵送のほか、FAX（番号：03-3575-4748）とE-mail（アドレス：hifubyoh-shinryoh@kk-kyowa.co.jp）にても受け付けております。

★誌上での匿名は随意ですが、原稿には住所・氏名を明記していただきます。

★採用分には粗品を進呈いたします。

本誌5月号「ステント除去により皮疹が改善した全身型金属アレルギー」を拝読して

一昔前まではステント術後の再狭窄が多く、循環器科領域で悩みの種でした。原因として金属アレルギーの関与が疑われたため、日本でも皮膚科と循環器科とが協力してステント使用者の金属アレルギーを調査する全国規模の合同調査プロジェクトが行われたことがあります。当時勤務していた山形県立中央病院の循環器科は東日本屈指の心臓カテーテル専門病院として名高く、お陰で私も調査研究に携わることになりました。ですがそのころ、基材に抗がん剤を添加し徐々に溶出させることで肉芽増殖を抑え再狭窄を予防する薬剤溶出性ステントが発売され、普及とともにステント術後の再狭窄率は激減し、翌年には調査は中止となりました。

このような経緯があるので、今回の永田先生、川久保先生の症例報告を興味深く拝読させていただきました。診断はとても明快でわかりやすく、特異な臨床像をみせた金属アレルギーでとても勉強になりました。文中で2、3点教えていただきたいことがありますので、ご教示いただければ幸いです。

1) 除去されたステントについて

狭窄したステントを除去したと記載がありますが、図4に狭窄の組織像が示されていますので、ベアメタルステントだけ摘出したのでしょうか？ それとも2個とも摘出したのでしょうか？

2) 薬剤溶出ステントとアレルギーの関係について
今回の症例ではベアメタルと薬剤溶出性の2種のステントが挿入されていますが、通常は統一することが多いようですので、別種なのは何か理由があったのでしょうか？

また、もし仮に2個とも薬剤溶出性ステントを使用していたとしたら、金属アレルギー症状はでなかった、あるいは軽く抑えられた可能性はあるのでしょうか？

石川博康

八戸市・湊高台皮膚科

5月号 声「テープかぶれへの工夫」を読んで

5月号の啄木ファン先生のご投稿、興味深く拝読いたしました。確かに皮膚排泄ケア認定看護師さんたちはラップ療法嫌いですね。

最近はラップ療法を完全に拒否する医療者は減ったように思いますが、従来の方法を全面的に否定して、かたくななまでにラップ療法を推進する勢力がいまだにあります。そうした態度に嫌悪を感じ、感情的な対立が生じているように思えてなりません。これこそがラップ療法の不幸な点だと思います。

先年の学会で驚いたのは、褥瘡の滲出液の吸収目的にペットシート（犬猫の排泄用シート）を使うという発表でした。私も室内犬を飼っており、そのうち介護が必要になりそうな老親もおりますが、



私は親のお尻に、いくら安いからといってペットシートを当てる気にはなれません。そう考えてみるとどこで線引きをするか(穴あきポリエチレンならよいのか、ペットシートもOKか、医療用品にこだわるのか)はそれぞれの倫理観・価値観によるものであり、それによってラップ療法に対する受け入れ態度も違ってくるのではないかと思います。

ちなみに医療用のビニールテープも発売されており、私はそれを使用しています。1巻120円程度で仕入れることができます。これなら大手を振って使えるのではないのでしょうか。

袋 秀平

横浜市・ふくろ皮膚科クリニック

皮膚病診療

臨床医のための皮膚病総合雑誌
Practical Dermatology

皮膚病診療ホームページのご案内

最新号の案内、本誌過去論文(2000年、Vol.22以降)の検索、「声」の欄への投稿など盛りだくさんのコンテンツを用意しています。IDやパスワードなどは不要です。アクセスをお待ちしております。

※論文の目次検索は、「トップページ」→「目次一覧/特集一覧」→左上の「目次検索」。論文タイトル、著者・共著者、キーワードからの検索が可能です。

<http://www.hifubyoh-shinryoh.com>

「皮膚病診療」既刊号のご案内

Vol.32, No.2	治療の工夫と試み	No.4	小児の腫瘍・肉芽腫	No.7	膿疱を伴う皮膚疾患(2)
No.3	結核と結核疹	No.5	皮膚のIgEアレルギー	No.8	炎症性内科疾患と皮膚
No.4	光線と皮膚	No.6	下腿の潰瘍(2)	No.9	腫瘍性内科疾患と皮膚
No.5	lichen	No.7	接触皮膚炎—2011	No.10	汗腺・汗管由来の良性腫瘍
No.6	いぼをめぐって	No.8	特異な分布を示す皮膚病	No.11	循環障害(2)
No.7	メラノーマ	No.9	線状、帯状の皮膚病	No.12	sexually transmitted infections (STI)
No.8	薬疹—2010	No.10	職業性皮膚疾患(3)		
No.9	白い皮膚病	No.11	ヘルペスウイルス感染症	増刊号	接触皮膚炎症例集
No.10	黄色い皮膚病(2)	増刊号	皮膚科処置法の実例	Vol.35, No.1	サルコイドーシス—2013
No.11	乾癬関連疾患	No.12	痒疹反応	No.2	顔面の紅斑(2)
増刊号	皮膚科検査法の実例	Vol.34, No.1	アトピー性皮膚炎—2012	No.3	痤瘡・痤瘡様発疹
No.12	細菌感染症および関連疾患	No.2	間擦部の皮膚病	No.4	アミロイドーシス(2)
Vol.33, No.1	小児の炎症性皮膚疾患	No.3	脂漏部位の皮膚病	No.5	体幹の皮膚病—炎症性
No.2	小児の先天性皮膚疾患	No.4	薬剤による皮膚障害—2012	No.6	体幹の皮膚病—非炎症性
No.3	爪および爪周辺の疾患	No.5	掌蹠の皮膚病	No.7	全身症状を伴う皮膚疾患(1)
		No.6	足底の皮膚病	No.8	全身症状を伴う皮膚疾患(2)